

駿建

2018 Apr. vol.46 No.1

日本大学理工学部建築学科 日本大学短期大学部建築・生活デザイン学科

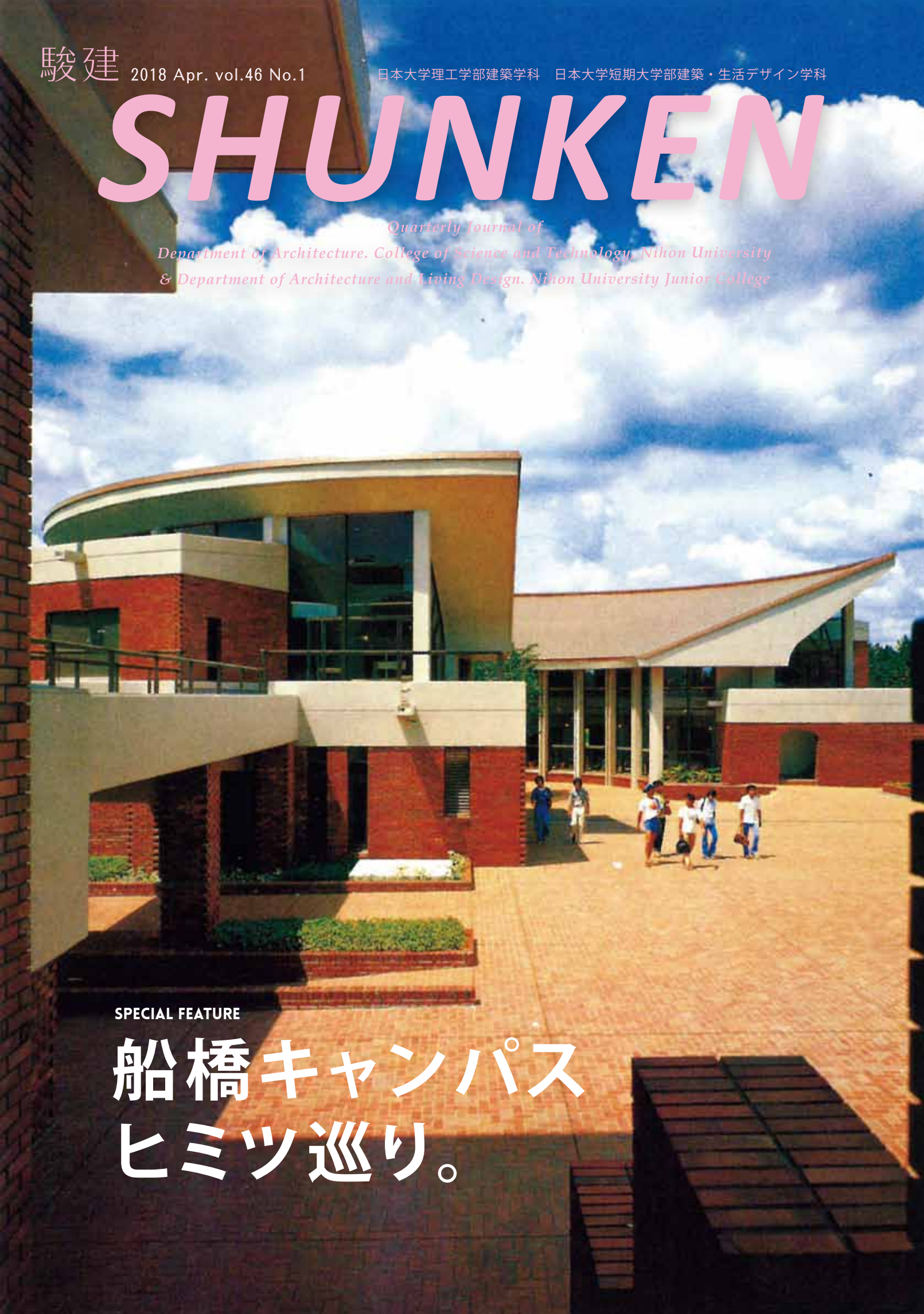
# SHUNKEN

*Quarterly Journal of*

*Department of Architecture, College of Science and Technology, Nihon University  
& Department of Architecture and Living Design, Nihon University Junior College*

SPECIAL FEATURE

## 船橋キャンパス ヒミツ巡り。



SPECIAL FEATURE

# 船橋キャンパス ヒミツ巡り。

それぞれが新鮮な気持ちで迎える2018年春

皆さんはどんな気持ちで、新しい年度をスタートさせているのでしょうか。

1年生の大学生活、2年間の短大生活といえば、船橋キャンパス。

どの学年の皆さんも、あのおだやかな雰囲気の中で過ごすキャンパスライフは、

記憶にしっかりと刻み込まれていると思います。

遠いからいやだなあとか、まわりに何も無いなあとか、

いろいろな声があるかもしれませんが、

実は、船橋キャンパスには、さまざまな歴史やヒミツがあります。

今回は8名の先生たちに、船橋キャンパスの魅力について聞いてみました。

ぜひ、この『駿建』を片手に、ランチタイムのあとにでもキャンパス内を巡ってみてください。

そう、暖かい春の船橋キャンパスは、本当に気持ち良いんですね！

写真提供＝宮田敦典

# 知ってる建築物 どれくらいある？



## 船橋キャンパスマップ



1 : 1号館/1965



2 : 2号館/1967



3 : 図書館/1971



4 : プラザ習志野/1978



5 : 12号館/1981



6 : 理工スポーツホール/1984



7 : レストドーム/1989



8 : 13号館/1992



9 : 先端材料科学センター/1995



10 : テクノブレース15/2002



11 : 14号館/2004



12 : 新サークル棟/2010



A : 薬学部キャンパス/1987



B : 船橋日大前駅/1996



C : 習志野高校/2012

さまざまな時代の建築技術の最先端を見ることができる船橋キャンパスの建築物たち。  
世界からも注目を集めるその訳を、斎藤先生にうかがいました。

## COLUMN 1

# 船橋キャンパスから世界へ —空間と構造の交差点

text= 斎藤公男 名誉教授

古

来より建築空間と構造技術は切り離すことができないものです。構造がなければ空間や形態は実現されません。建築の美しさと構造の合理性が巧みに融合された名建築物とは何か。たとえば、50余年前につくられた「国立代々木競技場」(1964)はその代表といえるでしょう。建築家・丹下健三と構造家・坪井善勝の協同による、日本が世界に誇る世紀の建築です。そのDNAを受け継いだ研究室が建築学科にあります。おそらく「空間構造デザイン研究室 (LSS)」の呼び名は世界に例がありません。ここには「空間と構造」「空間構造」「構造デザイン」といった研究テーマがひとつに凝縮されています。ArchitectureとEngineering Designの幸福な出会いや融合の交差点=Archi-Neering Design(AND)をめざし、教育・研究とともに実践的な活動が長年行われてきました。軽量構造やハ

イブリッド構造といわれる革新的で魅力的な作品の数々。船橋キャンパスにもさまざまな大きさや表情を持った「つどいの空間」が設けられています。国際的にも高く評価され、毎年多くの見学者が訪れる“巡礼の地”(船橋キャンパス)には、はたしてどのようなエピソードが隠されているのでしょうか。

## Episode 1 : アーキテクトとエンジニアの協同

大学教授である建築家はプロフェッサー・アーキテクトといわれます。

故・小林美夫名誉教授 (1928 ~ 2017) もそのひとりとして著名です。とりわけ大空間建築の設計に意欲的であり、「岩手県営体育館」(1967)、「秋田県立体育館」(1970)、「茨城・笠松運動公園体育館」(1974)などで研究室が協同した構造デザインは今でも新鮮です。しかし当時、その潮流が激しかつ

## 船橋キャンパス ヒミツ巡り。

さいとう・まさお：1938年、群馬県出身。1961年、日本大学理工学部建築学科卒業。1963年、同大学院修士課程修了。1973年、日本大学助教授。1991年、同教授。2007 ~ 09年、日本建築学会会長。2008年～、日本大学名誉教授。

た“ポストモダン”の波にのまれ、建築デザインとしての評価が高まらなかったのは残念としかしいようがありません。

1980年代、停滞した建築デザインの流れを変えていったのは、小林研究室が計画・設計した船橋キャンパスにおける建築群です。「代々木」以来、抑えつけられていた構造デザインへの道が拓きはじめます。ポストモダンから脱出する糸口を見出し、そこからハイブリッド構造への飛翔を促したのは、何とんでも「ファラデーホール (プラザ習志野)」(1978)。スパンわずか20m程の食堂棟を覆う車輪型張弦梁構造 (BSS) には、応力・変形を制御するアクティブ・ストリング、鋳鋼による連結リングといった新しいシステムや素材への注視とともに、「構造自体が建築表現に参画し得る」という建築本来の「構造表現」の意義をふたたび世界に発信できたことでしょう。

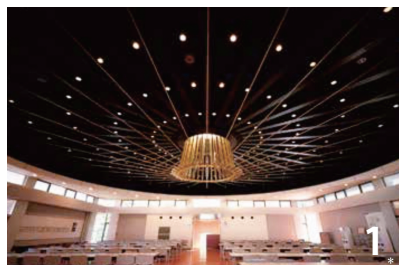
そこを出発点として、「小林スクール」ともいべき建築家達との協同を通して、新しい構造技術が開発・実現されていきます。

▷理工スポーツホール (1984 / 若色峰郎) : 平行型張弦梁による緩勾配屋根。無足場式スライディング工法。

▷先端材料科学センター (1995 / 秋元和雄) : ケーブルネットで支持された孔なしガラス構法 (MJG)。

▷船橋日大前駅 (1996 / 伊澤岬) : 自重に強いBSSと地震に強いブレースを組み合わせたスケルション構造。6本のストリングを同時緊張するフェースジョイント。

▷テクノスペース15 (2002 / 坪山幸王) : 室内天井を兼用した一枚物の膜屋根。メンテナンスフリーを可能とする、ばねストラット式ホルン型張力膜。



- 1 : ファラデーホール
- 2 : 先端材料科学センター
- 3 : 理工スポーツホール
- 4 : 船橋日大前駅
- 5 : テクノスペース15



6：テンセグリティ・スフィア  
7：レストドーム  
8：ウェルカムドーム  
9：テンセグリティ・トラスアーチ  
10：ライトウィング  
11：張弦アンブレラ



## Episode 2：ストラクチャル・アートへの挑戦

“構造芸術”という言葉がはじめて発せられたのは、歴史的名著「空間 時間 建築」（1941、S.ギーディオン）においてです。美しく巧みなストラクチャーとそこから生まれる空間と形態。建築と構造の交差点をカタチとして学生自身の手づくりによって実現してみる。それが1993年から毎年、船橋キャンパスで行われている「習志野ドーム」です。体験的建築学習とも、ものづくりイベントともいえるこのユニークで継続的な教育プログラムに対して、2007年、日本建築学会教育賞が授与されたことは、日本大学としても誇らしいことです。その背景に学生諸君の未知への知的好奇心と挑戦的活力があります。

そして小規模なテンポラリー・スペース（T・S）もまた、空間・形態・構造、システム（しくみ）とディテール（しかけ）、材料と施工といった建築の総合性を学ぶ上で大変興味深いものです。

1997年、日本大学理工学部で開催された日本建築学会の全国大会の会場は船橋キャンパスでした。その際に習志野ドームの作品群とともに制作、展示されたものを中心として、船橋キャンパスにはさまざまなT・Sが点在しています。一体どこにあるのか、探してみるのも楽しみです。

▷テンセグリティ・スフィア（1985）：4つの三角形を引張力で宙に浮かした「つくば万博タワー」のユニット実験モデル。

▷レストドーム（1989）：支柱なしのサスペンション膜。テフロン膜（米）・メロトラス（独）・富士山のシルエット（日）がつくる国際色豊かな四阿（あづまや）。

▷ウェルカムドーム（1997）：格子状のトラスと斜交ケーブルを結合させた単層張力ドーム。

▷テンセグリティ・トラスアーチ（1997）：直径150m超の「山口きららドーム」（2001）に適用されたタイプⅢのシステム・モデル。

▷ライトウィング（1998）：嵌合式アルミ材から構成された斜交型サスペンアーチ。

▷クーロン・ユニット（2001）：「唐戸市場・歩道橋」（2001、下関）を構成する立方八面体の実物大モデル。ばねストラット式ETFE膜ユニットを実験中。

▷張弦アンブレラ（2005）：「愛・地球博」（名古屋）で考案された組立て式日除け構造。

## Episode 3：普遍的な構造技術をめざして

「建築」を実現する構造技術の創造性には2つの側面があるといわれます。それは個性的創造と普遍的創造。膨大なエネルギーを注入し、人々を驚かすのが前者とすれば、力学・施工にわたるトータルな構造的合理性が評価され、リピーターとしてその後も繰り返し登場するのが後者といえそうです。

船橋キャンパスには、ホリスティックな構造デザインに支えられた建築作品があります。個性的でありながら、普遍的な技術開発に成功したいくつかの構造システム。それらは、やがて全国へとトランスファーしていきました。

▷張弦梁構造（BSS）とスケルション構造：「ファラデーホール」で誕生したBSSは、酒田（1991）・北九州（1994）・浦安（1995）・堀之内（1996）・静岡（2001）・下関（2001）・

京都（2002）などの大空間建築へ。世界最大の「グリーンドーム前橋」（1990）のBSSは「ファラデー」（放射型）と「スポーツホール」（平行型）の組み合わせであり、世界のベスト駅舎に選ばれた「金沢もてなしドーム」（2005）は「ファラデー」（BSS）と「日大前駅」（スケルション）の混成から誕生したものです。

▷テンセグリック構造：B.フラーのテンセグリティから発案されたテンセグリック構造。船橋キャンパスには全体的システムと集積的ユニット（トラス）の作品があります。そして前者は「出雲ドーム」（1992）や「エコパスタジアム」（2002、静岡）へ、後者は「山口きららドーム」や「建築会館・可動ドーム」（2002）へ。

▷ホルン型張力膜構造：「レストドーム」や「東京ドーム」から考案されたこのシステムのうち、ハンガー型は「建築会館・可動ドーム」、ストラット型は「柏ノ杜」（2007）へ。さらに「テクノプレース」で考案された“ばね式”は「山口きららドーム」や「大宮スタジアム」（2007）へ。

▷孔なしガラス構法（MJG）：「先端材料」で開発された日本では初めての構法は、「さいたまスーパーアリーナ」（2000）や「JR浦和駅」など全国のガラスファサードへ。

考案したアイデアを研究テーマとし、研究成果をプロジェクトに適用する。計算の前に基本構想があり、設計の中には生産的視点（製作・施工）がなければならぬ。発想から建設へ。こうしたイメージとテクノロジーが融合する建築群が発するメッセージは、今でも船橋キャンパスから世界へと発信されています。

かつてクラーク・カーは、大学を村・町・都市に例えて、大学の機能と規模を段階的な発展として捉えました。伊澤先生は船橋キャンパスの変遷を建築の中にどう考える？

## COLUMN 2

# 発生期 - 形成期 - 発展期 船橋キャンパスの変遷と建築

text=伊澤 岬 名誉教授

## 船

橋キャンパス（習志野キャンパス）は、戦後の高等教育の大衆化にともなう先駆的な郊外へのキャンパス移転で、東京23区内は工業等制限区域に指定され、工場とともに大学の新設が長らく制限されていました。本校地はもともと陸軍の練習場で、北習志野団地を開発したUR都市機構とともに1965年に校地を取得し、グリッドパターンの中、1、2号館を皮切りに、9号館までがほぼ2年間で建設されました。

### キャンパスの発生期

#### 「打ち放しコンクリートの校舎群」

設計は、故・小林美夫名誉教授。ザハ・ハジドの新国立競技場案と同様なダブルアーチキールの美しい「岩手県営体育館」（1967）の設計者であり、これは半世紀前の作品ではありますが、今だ凛とした美しさが

漂う名建築です。

この校舎群のデザイン的原点は「津田沼校舎本館」（1961、現・生産工学部14号館）で、エントランスの吹き放しのピロティ、大きく張り出した打ち放しコンクリートによる庇とバルコニー、独立した彫刻的な階段室、折板屋根による製図室からなるもので、本学の教授だった吉田鉄郎の教え「率直に、単純に無理無く、清々しいプロポーション」を具現化した作品といえます。残念ながら「1号館」（1965）は、「本館」に比べかなり簡略化されるとともに、これをベースとした2倍の長大校舎となる5号館以降の校舎が、設計者に相談することなく建設を進められました。

### キャンパス核の形成期

#### 「レンガの建築、図書館とプラザ習志野」

キャンパスアーキテクトとしての小林先生

## 船橋キャンパス ヒミツ巡り。

いざわ・みさき：1947年、栃木県生まれ。1969年、日本大学理工学部建築学科卒業。1971年、同大学院修士課程修了。日本大学理工学部建築学科、海洋建築工学科、社会交通工学科（現交通システム工学科）教授を経て、日本大学名誉教授。

の作品系譜は、「岩手県営体育館」に代表される「屋根のデザイン」の次に、「レンガのデザイン」が加わります。その代表作が「習志野（現・船橋）図書館」（1971）で、レンガと打ち放しコンクリートによる特徴的な壁面構成は、当時のレンガ建築ブームの原点となるものです。レンガはコンクリートの耐久性に配慮した選択であり、その後の「プラザ習志野」（1978、BCS賞）とともに、グリッドキャンパスに核を形成しました。

これらの成果は「日本学会館」（1982）をはじめ、「東京薬科大学」（1976）と「静岡県立大学」（1989、BCS賞）の2つのキャンパスの設計につながり、学位論文「薬学系キャンパスの建築計画的研究」をまとめ、若色峰郎元教授による設計の「薬学部キャンパス」（1987）に活かされました。



1



2

- 1：図書館のレンガと外周を取り巻く池
- 2：プラザ習志野の特徴的な屋根



- 3：中央門とゲートハウス越しの日本大学  
100周年記念広場と駅  
4：改札空間を構成する張弦梁構造  
5：テクノスペース15のストラット式張力膜  
構造  
6：14号館のソーラーチムニーと各階の底と  
なるシースルー型の太陽光パネル



## キャンパスの発展期

### 「日大前駅とキャンパス軸の建築群」

駅における建築と土木の役割は明確で、土木はインフラ、建築は仕上げ化粧という縦割り分担で、切符を持たない無用な人々を拒絶する、管理された空間としての駅が多く成立してきました。そこでヨーロッパの終着駅に象徴されるような、乗車の有無にかかわらず、人々を迎え入れる開放的な駅を目指しました。そのため人々の交流が図れる機能とともに、改札空間に全天候型の大空間を張弦梁構造で具現化しました。この「船橋日大前駅」（1996、鉄道建築協会作品部門最優秀賞、運輸省鉄道局長表彰）によって、理工学部を含む三学部と二高校、中学、小学校が有機的につながり、学生・教職員約1万人の学園都市が形成されました。構造は斎藤公男名誉教授によるもので、「岩手県営体育館」の設計者でもあります。

設計のきっかけは、建築学科助手を経た海洋建築工学科在籍時、誘致活動を中心の

に進めていた交通システム工学科から、駅の設計と日本で最初の土木デザイン教育の立ち上げを依頼されたもので、建築家内藤廣氏が東京大学土木工学科・景観研究室に招聘される10年前の移籍でした。

「日大前駅」の成果は、都営地下鉄大江戸線プロポーザルコンペで当選した「新宿西口駅」（2000）「東新宿駅」（2000）の設計につながりました。

まちづくりを含む総合化の視点から、駅前広場、薬学部へ続くアクセス道路を展開して、広場には信号のないラウンドアバウト（円形交差点）を設計、それを基点にキャンパス核とつながる南北軸をキャンパス軸として設定しました。ここに中央門とゲートハウスが加わります。この軸に、その後「テクノスペース15」（2002、BCS賞）と「14号館」（2004）、「習志野高校」（2012）が設置されました。

「テクノスペース15」は、実験施設群を開放性と回遊性に富んだショーケースと見立て、全天候型の外部空間をテント膜を用

いた、ばねストラット式張力膜構造で構成しています。また「14号館」は、再生エネルギーによるソーラーチムニーと各階テラスの底となるシースルー型の太陽光パネルによって、省エネルギーを象徴する建築です。設計は、前者が坪山幸王元海洋建築工学科教授、後者が日本設計の大野二郎氏（小林研卒）となります。

当時、習志野砂漠と呼ばれ、砂塵吹き荒れる「図書館」の池に、小林先生宅から運ばれたたくさんの鯉が放たれました。知のオアシスであるとともに池は環境を象徴するオアシスとなり、キャンパスのシンボルツリー、桜並木も整った頃に、突然池はつぶされました。歴史を知らない無謀さに驚きました。今日では小林先生のあと、若色先生に引き継がれたキャンパスアーキテクトの不在が気になります。

将来キャンパスの遺産として残すべく、「図書館」の改変を原状に戻し、CSTミュージアム、記念館などとしての再利用が計られることを期待したい名作と考えます。 ■

伊澤先生によるキャンパスの成長と変化に取り上げられた建築物以外にも、キャンパス内には多数の建築物があります。そのいくつかを渡辺先生が紹介。

COLUMN 3

船橋キャンパスで  
私に関わった3つのプロジェクト

text= 渡辺 富雄 特任教授

**船** 橋キャンパスは、今から54年前の1965年に1～4号館が竣工したところからはじまります。その後、下表のようにさまざまな施設が整備されていきました。その整備には、建築学科の先生方や多くの建築学科卒業生が、設計事務所、建設会社の立場に関わってこられました。

施設の拡充に伴い、キャンパスのランドデザインは変化していきました。60年代の正門は現在の習志野高校側で、そこから交通総合試験路に一直線に伸びる軸を基準にしたグリッドパターンに基づいて、南面一文字型の建築物が配置されました。70、80年代の正門は西側の「先端材料科学セン

ター」の隣で、新京成線北習志野駅からメインのアクセスでした。90年代以降は、東葉高速鉄道「船橋日大前駅」が開設されたことにより、キャンパスの動線が大きく変わりました。日大前駅側に正門が移り、習志野高校に続くキャンパス軸に沿って、「テクノブレース15」、「14号館」などが整備されました。

私は、船橋キャンパスの形成期の真っ只中の1976～78年の3年間、故・小林美夫名誉教授をはじめ、若色峰郎元教授、坪山幸王元海洋建築工学科教授、伊澤岬名誉教授のもとで過ごしました。私の学生時代、この4先生は建築学科の同じ研究室（部屋）

船橋キャンパス  
ヒミツ巡り。

にいました。丁度、「プラザ習志野」(1978)が竣工したときでした。当時、小林先生をリーダーとして参加した、第二国立劇場や静岡県立大学のコンペなどを通して、先生方の建築に対する取り組み方を拝見できたことは、大変勉強になりました。

卒業して3年後、縁あって大学に戻り、大学院で指導を受けた若色先生のお手伝いをするかたちで、いくつかの船橋キャンパスのプロジェクトに関わることができました。

その中から、私に関わらせていただいた、「理工スポーツホール」、「薬学部キャンパス」、「13号館」の3つのプロジェクトを紹介します。



1980年代はじめの習志野校舎



2000年代はじめの船橋キャンパス

| 年代   | 船橋キャンパスの主な施設                                                                                                                                                                                                                             | 【主な関連事項】                                                                                                                |
|------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1960 | 1、2、3、4号館/1965（小林美夫他）<br>5、6、7、8、9号館/1967（小林美夫他）                                                                                                                                                                                         | 【短大工科を理工学部習志野校舎へ移転/1967】<br>【教養課程を文理学部より理工学部習志野校舎へ移転/1968】                                                              |
| 1970 | 図書館/1971（小林美夫、若色峰郎、坪山幸王、伊澤岬他）<br>物理実験A棟/1972<br>階段教室・薬用植物園管理棟・海洋建築実験研究棟/1973<br>交通試験道路・運動場/1973<br>大型構造物試験棟・風洞実験室/1975<br>工作技術センター/1975（坪山幸王他）<br>プラザ習志野/1978（第20回BCS賞他）<br>（小林美夫、若色峰郎、坪山幸王、斎藤公男他）                                       | 【1978/海洋建築工学科、航空宇宙工学科、電子工学科設置】                                                                                          |
| 1980 | 10、11号館/1978（若色峰郎、坪山幸王他）<br>総合水槽実験棟/1979<br>中央庭園/1980<br>12号館/1981（若色峰郎、坪山幸王他）<br>理工スポーツホール/1984（1987学会作品選奨、東京建築賞他）<br>（若色峰郎、斎藤公男、渡辺富雄、佐賀和光/日大08他）<br>測量実習センター/1987（若色峰郎、渡辺富雄他）<br>レストドーム/1989（若色峰郎、斎藤公男）                                | 【薬学科が分離独立し薬学部設置/1987】<br>【薬学部キャンパス/1988（若色峰郎、渡辺富雄他）】<br>【習志野高校武道館/1991（若色峰郎、渡辺富雄他）】                                     |
| 1990 | 13号館/1992（若色峰郎、坪山幸王、渡辺富雄他）<br>先端材料科学センター/1995（東京建築賞奨励賞他）<br>（秋元和雄/日大08、若色峰郎、斎藤公男他）                                                                                                                                                       | 【東葉高速鉄道（船橋日大前駅）/1996（鉄道建築協会作品部門最優秀賞、千葉県建築文化賞奨励賞、1998学会作品選奨他）<br>（伊澤岬、斎藤公男、眞鍋勝利/日大08他）】<br>【習志野校舎を船橋校舎（キャンパス）に名称変更/1996】 |
|      | ゲートハウス（中央口）/1996（伊澤岬、眞鍋勝利/日大08他）<br>笠原記念館/1997<br>環境・防災都市共同研究センター/2000<br>テクノブレース15/2002（2002学会作品選奨、第44回BCS賞他）（坪山幸王、斎藤公男他）<br>14号館/2004（JIA環境建築賞優秀賞他）（大野二郎/日大08他）<br>マイクロ機能デバイス研究センター/2005<br>新サークル棟/2010（H23建築士会連合会賞作品奨励賞）（今村雅樹、山中新太郎他） |                                                                                                                         |
| 2010 |                                                                                                                                                                                                                                          | 【習志野高校/2012】                                                                                                            |

## ▷多目的利用を配慮した理工スポーツホールの計画（1984）

当時の習志野校舎では、学部13学科、短期大学部5学科、合わせて約5,500名＋教職員が生活していました。キャンパスの最大イベントである開講式（約3,000名）のときに一堂に会する講堂が必要である一方で、日常的な体育の授業の場がありませんでした。そこで、ロールバックチェアスタンドの採用、迫り方式のステージ、電動ルーバーによる日照調整などにより、集会、スポーツ、展示などの多目的な利用を考えました。構造的な特徴としては、何といても斎藤公男名誉教授の提案による張弦梁構造（BSS）とスライディング工法が挙げられます。大スパン建築のデザインや、架構・施工性の合理的な融合という点で先駆的な事例です。



ロールバックチェアスタンド設定時

## ▷増築を見込んだ薬学部キャンパスの計画（1988）

薬学科が分離独立して薬学部となることに合わせて、交通総合試験路の奥の敷地に新キャンパスが計画されました。増築が重ねられた結果、キャンパスの風景は大幅変わりましたが、当初の計画では、実習室棟、教室棟、食堂棟、事務棟、研究棟の5棟に分離して、取り囲むように配置することによって、適度な密度感の中庭をつくり出すことを意図していました。実習室棟は、さまざまな薬物を扱うために換気設備などが重要になります。それらをすべて屋上に設置し、切妻の屋根で覆うことにしました。それがキャンパス全体の建築物のシルエットになっています。



竣工時の薬学部キャンパス

## ▷使われ方の変化を想定した13号館の計画（1992）

駿河台キャンパス1号館の建て替えを迎え、教室などを充足させるために13号館の計画がスタートしました。船橋日大前駅の誘致活動が行われている頃で、駅が開設されると正門が変わるため、キャンパス内を南北に通る2つの道路（軸）をピロティでつなげるようにしました。将来的に研究室にも転用されることを視野に入れ、両面採光、スパン割りを考慮しています。現在は大教室以外の使い勝手は大幅変わっていますが、キャンパス内で一番高い建築物としたのは、若色先生が日大文理学部キャンパスの研究室棟のように、キャンパスの中心をつくり出したいという考え方が反映されています。



竣工時の教室棟

## COLUMN 4

# 14号館 - サステナブル建築 -

text= 早川 眞 元教授

14

号館の新築計画に際しては、理工学部内に当時の高宮眞介教授、今村雅樹教授、故・石丸辰治教授（制震担当）、早川（環境・設備担当）を中心とした14号館建設委員会が設置され、日本設計、大成建設とともに「居心地の良い、安全で省エネルギー性能に富んだ建築」の実現に努力した。竣工は2004年である。

14号館は、建築デザインと一体化したさまざまな省エネルギーや資源保護の取り組みがなされている。そのひとつが「ソーラーチムニー」。ラウンジに面した、温室を縦にしたような2本のガラスのタワーである。チムニーの中の暖気の浮力で排気が行われ、教室やラウンジの自然換気を担う。最近の建築では、ダブルスキンやエコシャフトとして発展し、広く使われている。

その他に図に示すように、雨水を溜めてトイレ

の洗浄水や前庭の散水に使う雨水利用システム、安い夜間電力で氷を製造・貯蔵する空調用の冷熱システム、教室の二酸化炭素濃度を検出して換気量を制御するシステム、屋上緑化や太陽光発電など、さまざまな取り組みがなされている。

竣工後の性能検証のため、測定やシミュレーションを行った結果、以下の3つを確認することができた。

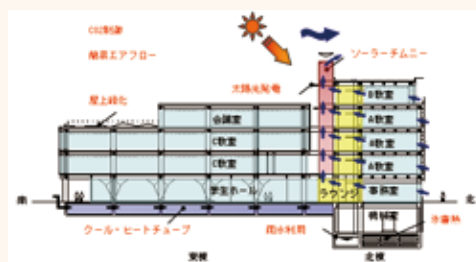
- ・ソーラーチムニー2基で建築物全体の年間消費エネルギーの4%分を削減
- ・仕組み全体で約30%の省エネルギーを達成
- ・雨水の利用で、年間上水代替率は54%を達成

なお、本建築はサステナブル建築・住宅賞の建築部門において、(財)建築環境・省エネルギー機構理事長賞を受賞した。

はやかわ・しん：1968～2001年、鹿島建設技術研究所にて超高層建築や大空間建築の環境・設備の研究や計画に携わる。2002～09年、日本大学理工学部建築学科教授。建築環境と建築設備の研究・教育を担当。2009～18年、日本大学大学院非常勤講師。



14号館外観



14号館の省エネルギーの取り組み

設計に携わった山中先生が語る、さまざまな活動を支える新サークル棟の誕生秘話

## COLUMN 5

# サークル活動のための居場所を 実態調査から考える

TEXT= 山中新太郎 准教授

### 船

橋キャンパスには、スポーツ系や文科系を合わせて約50のサークルがあります。当時キャンパス内に分散していたサークル室をまとめて、新しく建て替えたのが、この「新サークル棟」です。サークル活動は授業や研究活動とともに大学生活における重要な活動です。私自身も学生時代には理工テニス部に所属してサークル活動を楽しんできたので、サークル棟の建て替えの設計をすることになったときには不思議な縁を感じたのを覚えています。設計は、大学の新しい魅力づくりのひとつとして、明るく、学生達が相互に交流できるような施設をつくりたいと考えました。

設計にあたって、まず既存のサークルの実態調査を行いました。それまでのサークル棟はプレファブの部屋が並んでいるだけの十分なものとは言えませんでした。サークル同士の交流もほとんどありません。新しい施設では、学生たちの間で自然に交流が生まれるような仕掛けをつくりたいと思いました。サークルによって部屋の使われ方はさまざまでした。また、サークル自体の入

れ替わりもあります。そのため、この施設には、現時点での各室の使われ方を受け止めながら、将来の変化にも対応できるようなシステムが必要でした。

### グリッドを縫うように領域をつくる

建物はそれぞれの活動がしやすいように平屋建てとし、建築可能な最大の大きさで外形を定めました。そして、3.8m×3.2mのスパンで均等に柱を立て、柱に囲まれた空間を部室で使うひとつの空間単位（セル）としました。できあがった120のセルのうち60を部室などの個室に、残りの60を外部扱いの共用廊下に割り振り、それらをモザイク状に配置しました。中央付近には学生たちが集まりやすいミーティングルームや廊下の溜まりを配置し、多様な経路が生まれるように部屋をレイアウトしました。

### サークル活動の自律性や多様性を育む

#### 建築の座標と形式



新サークル棟外観

この建物では、どこまで設計し、どこから使用者である学生に使い方を委ねるのかという問題を考えさせられました。学生たちの自由をできるだけ発揮できるようにする一方で、無秩序や混乱を助長させるようなことは避けなければいけません。私は、この建物の設計を通じて、彼らの活動のための座標を描き、機能ではなく形式を与えたいと考えました。座標と形式があることによって、学生たちは自分たちの居場所や他のサークルとの関係を相対化し、自分たちに与えられた自由の射程を意識できるようになると考えたからです。

この建物を使いをはじめて7年ほどが経ちました。彼らは、たくましく自分たちのアジール（聖域・自由な領域）を築いているように思います。この建築物ができてから他のサークルの活動が気になるようになってきた、と言ってくれた学生がいました。建築空間がサークル同士の交流を少しでも変えていけたとすれば、嬉しいことです。 駿



新サークル棟内観



船橋キャンパス  
ヒミツ巡り。

## COLUMN 6

# 船橋キャンパスの実験施設

text= 宮里直也 教授

# キ

キャンパス内には、小型飛行機や人力飛行機の飛行試験にも利用される「交通総合試験路」をはじめ、たくさんの実験施設があります。その中でも建築学科の学生が利用する施設を中心に紹介していきたいと思います。

まず、建築学科のすべての学生が実験施設を利用する科目として、1年次設置の「建築基礎実験（必修科目）」があります。また、4年次の「卒業研究・設計」や大学院生の研究において、主に構造系の学生が、実験施設を利用してそれぞれの研究を進めます。具体的には、木造の壁の耐力を求める試験や、鉄骨建築物の接合部に関する試験、地震に関する振動試験など、実験的に検証が必要な構造物に関するあらゆるテーマについて、縮小模型や実物大模型を用いて検証実験が行われます。

### ▷「大型構造物試験棟」(1975)

大学の研究施設としては世界有数のものとして知られています。建築物の柱や梁などの構造部材の実大試験ができる大型構造物試験機（3,000tの圧縮力が加力可能）や、

地震などに関する試験に用いる多入力振動試験装置、さまざまな実験ができる反力壁と反力床からなるテストフロアがあります。「建築基礎実験」では、多入力振動試験装置に乗って地震体感なども実施します。

### ▷「環境・防災都市共同研究センター」(2000)

水平・上下3軸同時に加振ができる振動装置をはじめ、実物大の木造住宅の振動実験可能な平面サイズが15m×20mの超大型振動台、地盤の試験や免震装置の性能確認ができる設備などがあります。「建築基礎実験」では、建築物の共振する現象について、模型を通して理解するための振動実験が行われます。

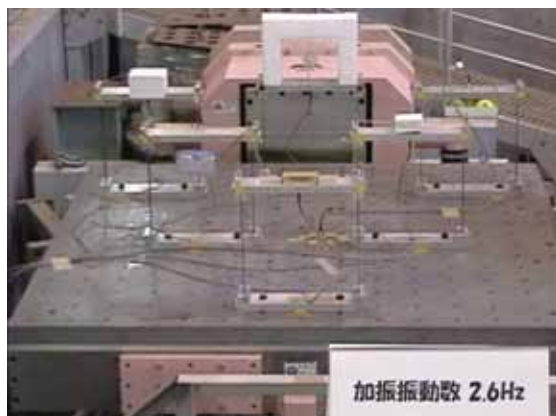
### ▷「建築風洞実験室」(1967)

5号館の地下には、建築学科が独自に保有する、建築構造物に働く風力を測定するための実験施設があります。測定路は、横1.2m×縦0.9m×長さ約14mのサイズで、風速20m/sまで実験ができます。種類としては、スタジアムや膜構造のような曲面形状を有する屋根などに加わる風圧力を測定します。「建築基礎実験」では、風の流れを意識して紙でつくった模型がどれくらいの風圧に耐えることができるかを実験します。

その他にも、木造住宅に用いられる壁の性能を確認する試験装置がある「1001建築実験室」や、測定の授業で利用する「測量実習センター」などもあります。ぜひ、皆さんも積極的に利用してみてください。 験



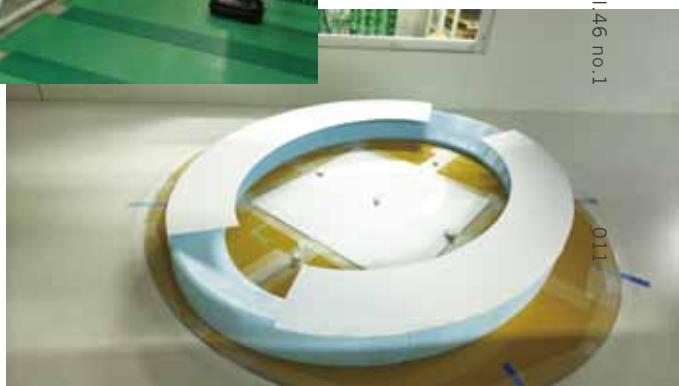
大型構造物試験棟：多入力振動試験装置に乗って過去の巨大地震を体感



環境・防災都市共同研究センター：建築基礎実験の課題を3次元電磁式振動試験装置に載せて振動実験



建築風洞実験室：エッフェル型風洞試験装置によりスタジアムのフィールドの風環境を計測中



## COLUMN 7

# 船橋キャンパスを エンジョイする7つのコツ

TEXT= 山崎誠子 短大准教授

**新**

入生の皆さん、学部でも短大でも船橋キャンパスライフがはじまりました。そこで、知っているのと得する情報を、今年3月に卒業した短大OB・OGに教えてもらいましょう。

1

## 教室の外で、勉強するならあそこがオススメ!



コピー機は、12号館1階とプラザ習志野内のコンビニ、13号館カフェの隣のフリースペースにあります。オススメの勉強場所は、13号館カフェとその隣のリーディングルーム。カフェはインターネットが使用可、レポート作成などでPCを使うときに便利です。隣のリーディングルームはカフェより遅い時刻まで開いていて、机も広いので、テスト勉強やデザインの課題をするのに適しています。(中国崇仁)

2

## 製図道具や模型材料を購入するなら!



上：タケダの店長の鈴木さんとスタッフ  
右：ナナオの店長の横山さん



学校内にはタケダとナナオがあります。どちらも働いている人が優しく、製図道具などでわからないことがあれば教えてくれます。学外には、18時まで営業している巖翠堂があります。(宇津里緒奈)

3

## 図書館で建築雑誌を読みあさろう!



図書館には建築雑誌が多数あり、設計課題の参考になります。本棚の近くの机は、静かなのでオススメの勉強スポットです。先生たちのオススメ本もあるので、読んでみるのも面白いかも! 返却期限を過ぎると、超過日数分、貸し出し停止になるので注意が必要。(松本夏輝)

4

## 生活にかかせないスーパー、コンビニ、ファミレスは!?

物販では、船橋日大前駅東側にコンビニのデイリーヤマザキとセブンイレブン、一人暮らしにはすごく助かるスーパーのマミーマート、模型材料も揃えることができる100円ショップのダイソーがあります。飲食ではガストとマックがあります。放課後には、友達とガストで食事をして帰ったり、マックで勉強やレポートを書いたりなどで利用しました。(菊池範圭)

5

## 北習志野駅周辺にもお店があります

北習志野駅から少し離れていますが、ジョナサンが24時間営業で、みんなで勉強するときに利用しました。西友も24時間営業していて、安いので便利です。(笠原寛都)

## 船橋キャンパス ヒミツ巡り。

### 6 通学の交通費を抑えるなら、この方法で!

川口方面からの通学では東西線&東葉高速鉄道は料金が高いので、武蔵野線から乗り換えて新京成線を利用し、北習志野駅から歩くのがベスト。後ろの車両に乗れば乗り換えの階段が近いのでおすすめです。朝は学校方面に行く人が少ないので、ほぼ座って通学ができます。駅から学校までは徒歩で約20分ですが、すぐ慣れます。(伊東裕)

### 7 結局、助けてくれるのは周りの人です

できるだけ知り合いをたくさんつくるのが良いでしょう。大学では、急遽授業やテストの日程が変わることがあります。情報はメールや掲示板に掲載されますが、知り合いが多ければ多いほど情報が自分にも入ってくるので、人見知りせず、いろいろな学生や先生と積極的につながりを持つと良いと思います。(内山知哉)

#### 番外編

#### 学食人気ランチランキングを発表

ランチタイム、皆さんはこの学食で食べるのが好きですか? 意外とそれぞれ特徴がある学食で、何が一番お気に入りか、学生の皆さんに聞いてみました。それぞれのランキングを発表!

##### ファラデーホール

- 第1位 からあげ丼
- 第2位 汁無し担々麺
- 第3位 チキン南蛮定食

##### ダビンチホール

- 第1位 黒豚焼肉ランチ
- 第2位 からあげ丼
- 第3位 カレー

##### パスカルホール

- 第1位 肉うどん
- 第2位 カレー
- 第3位 カツ丼

(2017年度 船橋キャンパス食堂アンケート調査  
対象:建築学科1年生 261名)

#### COLUMN 8

### 空き時間の過ごし方どうしてる?

text= 古澤大輔 助教

今

回の駿建は船橋キャンパス特集なので、1年生に空き時間の過ごし方について聞いてみました。アンケートは、2018年1月の「建築設計Ⅰ」の授業で行い、96名の学生から回答を得ました。

#### Q. キャンパス内のどこで過ごす?

A. ダントツ第一位は○○!

屋外か屋内かで見ると、約95%とほぼ全員が屋内で過ごしているようです。寒い時期にアンケートを行ったからかもしれませんが、船橋キャンパスには屋外のオープンスペースがたくさんあるので、この結果は少し意外でした。具体的な場所を見ると、食堂の空いている座席と答えた学生が4割以上で一番多い。あと図書館で過ごしている学生も約3割いました。最近の学生は図書館をあまり利用しないと聞いていたので、これも意外な結果でした。図書館という空間を利用はするけど、本は借りないということかもしれません。

#### Q2. 空き時間にキャンパスの外へ出ますか?

A2. 意外とみんなアクティブに外へ!?

キャンパス内では屋内で過ごすインドア派が多い学生たちですが、約半数近くが空き時間にキャンパスの外に出ているようです。船橋キャンパスは広いので、外に出るのが億劫になりそうだけど、意外と学生たちはアクティブ(?)に過ごしているようです。でも、その行先はファストフード店と友人宅が多いので、必ずしもそうとは言えないかもしれませんが。

#### Q3. 後輩達に教えたいオススメの過ごし方は?

A3. 「ひとりで」「みんなで」を巧みに使い分け

後輩たちに教えたいオススメの過ごし方について自由回答を見ると、「ひたすら寝る」という脱力系の回答がちらほら見受けられました。一方で、「友達と勉強できる時間なので、ひとりじゃわからないところを勉強する」「やらないといけない課題や勉強などをする」といった、教員としては安心できる回答や、「友達と語り合う」「船橋アリーナでトレーニング」というアツい学生もいて面白い。

アンケートに答えてもらった1年生たちは、2年生になると駿河台キャンパスに移り、船橋とは全く異なる環境になるわけですが、引き続き自分なりの空き時間の過ごし方を見つけてほしいと思いますし、今年度入学した新入生たちも、船橋キャンパスの1年間に有意義に過ごしてほしいと思っています。

修士論文  
環境系

## 齋藤賞

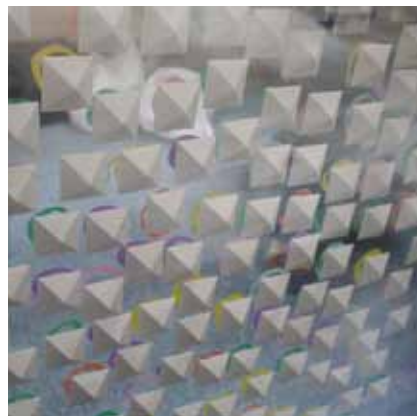
## 突然道が開ける瞬間に見出した研究の楽しさ

## 拡散体の散乱係数測定法の提案と設置方法が室内音場に及ぼす影響

中未田 道さん (M2 | 羽入研究室)

**室** 内音響を改善したり、音響障害を除去するために、壁面に凹凸を持った拡散体を設置することがある。しかし、吸音による室内音場の変化を残響時間などで計測する方法は、ある程度は確立されているが、拡散体の凹凸度合いが音場にどの程度影響するかを定量的に評価する指標がないのが現状だった。そこで中未田さんは、拡散の散乱度合いを示す新たな指標を提案し、それが音場に与える影響を新たな別の指標でとらえることを試みた。実測では、縮尺

模型を用いた実験を何百回と行った。「1/10縮尺模型実験では、実寸より10倍の精度が求められるので、とても神経を使いました。無響室に2、3時間籠りながら測定を何度もしていると、感覚が麻痺してきて大変でした。3年間研究をやってきて、成績の良し悪しと、研究の良し悪しはあまり関係ないと感じました。どんなこともそつなくこなす人には研究は向いていません。それよりも、人一倍努力しつつ、泥臭いことでも積極的に地道に進めていくことが大切だと思います。」

修士論文  
構造系

## 齋藤賞

## 多くの時間を捧げられる最後のチャンス

## 免震構造設計方法に関する研究 - 層せん断力係数及び応答加速度に対応した応答性能設計図表 -

黒田竜司さん (M2 | 秦研究室)

**黒** 田さんは、授業がきっかけで、高層建築物や大規模建築物の免・制振構造に興味を持った。現在の免震建築物の解析的手法による設計方法は、時間を要することに加えて、免震建築物の地震応答への理解や経験の積み重ねには寄与しない。そこで今回の研究では、免震部材の範囲を拡張することで汎用性を確保できる設計方法の提案を行った。これにより設計業務の負担が軽減され、設計者の理解を助けることができる。汎用性が必要であったため、多くのパラ

メータに対して検討を行い、傾向を把握することに苦労した。「プログラミングを学び、効率的に作業が進むように心がけました。最初は無駄な検討がたくさんありましたが、研究のまとめ方を考えたり、追加検討を行い続けることで、点と点がつながるようになりました。“無駄”にも価値があるのだと感じるようになりました。社会人になるとお金を稼ぐことが求められますが、学生の研究はそうではなく、自分の成長のためにすることができます。それが研究の楽しさだと思います。」

修士論文  
計画系

## 吉田鉄郎賞

## 分析や解明を合理的ストーリーで表す楽しさ

## ハノイ文廟群の伽藍変遷からみた各建物の造営年代の研究 - 黎朝後期から現在までの史料再検討と実測データを用いた分析 -

PHAN THANH TUNG (ファンタントウン)さん (M2 | 重枝研究室)

**文** 廟とは、孔子などの儒教の重要な人物を祀るベトナムの代表的な霊廟のこと。ファンさんは、これまでにベトナムの伝統的建築物の修復・復元に携わることで、ベトナムにおける最古の歴史を持つハノイ文廟の研究を行う必要性を感じていた。これまでハノイ文廟に関する修理報告書は刊行されておらず、各時代におけるハノイ文廟の建築研究に関する情報も公開されていなかった。さらに、ベトナムでは建築史学に基づく科学的調査を踏まえた建築物の修理や復元が

課題となっていた。「各時代の図面だけでなく、ベトナムの封建時代の漢文史料やフランス植民地時代のフランス語の資料、古いベトナム語の資料などを、資料ごとに異なる手法で分析することが大変でした。さまざまな論文や建築関連資料などを読み込み、理解していましたが、何よりも各建築物の造営年代を判定していくことが一番難しい作業でした。論文とは文書を書くことだけでなく、分析・解明した結果を合理的なストーリーで表すこと。そこに楽しさを感じました。」



修士設計

吉田鉄郎賞

## オリジナルな理論と作品をセットで打ち出せる楽しさ

既存形態の構成を援用した福島県白河市白河市中央公民館の建替計画 - 再生建築における建築的部位と空間構成に関する分析を通じて -

添田魁人さん (M2 | 古澤・二瓶研究室)

近年、高度経済成長期に整備された公共建築が、一斉に建て替え更新・修繕を迫られているが、そこでは建て替え以前の存続実績は考慮されず、設備更新の利便性や施設の長寿命化が求められている。一方で、建築が持つ社会的持続可能性を提示し、地域社会の文化・歴史性の保全を示唆する既存建築活用の機運は依然として高まり続けている。そこで添田さんは、地域文化の形成を担った既存建築に対し、社会的持続性に応答させる建て替え行為に取り組ん

だ。「建て替え以前の姿を“既存形態”として定義し、これを踏襲することで設計プロセスに援用する。同時に、再生建築に見られる空間構成の操作を分析・適応することで、“建築の透明化”を実装しました。公共建築が存在していた街区を再生するように、既存形態と建て替え行為と未来の増改築に『断続的な関係性』を生み出すことを目指しました。今回の提案は、再生建築と新築の二項対立的な状況を調停する設計手法の開発を目的とした実験でもありました。」

卒業論文  
環境系

桜建賞

## 現場で得た貴重なデータを活かす喜び

## 鉄道高架下保育園の音・振動環境に関する実験的検討

岡庭拓也さん、中津尚雄さん (4年 | 建築音響研究室)

近年、都市部における待機児童問題が取り上げられるが、土地の確保や近隣住民との問題を回避する方法として、これまで保育園が設置されることの少なかった高架下スペースの利用が増えてきた。しかし、一般の保育園と比べ、音や振動の環境に大きな違いがある。高架下保育園が実際にどのような環境であるのか、また子どもたちにどのような影響を及ぼすのかを研究するため、騒音・振動の測定やアンケート調査、園児の行動観察などさまざまな方法でデータの収

集、検討、考察を行い、子どもたちが健やかに過ごせる目安を見つけることを試みた。「保育活動中の保育園を訪れて、4～7時間ほど測定を行いました。その際、機器の横に私たちが座り、子どもたちの行動観察も行いました。今回は、首都圏内の約1/3の高架下保育園についてデータを集めることができましたが、母数が足りず、“おおよその目安”の値を提案するかたちに留まりました。また、今あるデータの中でもさらに検討したい項目が多く残されています。」

卒業論文  
構造系

桜建賞

## 一生懸命取り組んできた研究が認められた喜びと達成感

## リアルタイムオンライン応答試験システムの構築

阿久戸信宏さん、浅香光平さん (4年 | 秦研究室)

2016年に発生した熊本地震では、免震構造の建築物がその効果を発揮したことがわかっている。しかし、記録された免震層の軌跡と応答解析による解析結果は大きく異なることが報告されており、その原因のひとつに、実挙動による免震部材の特性値の変化が影響していると予想されている。特に複雑な履歴特性を描く高減衰系積層ゴムでは、実挙動を考慮した数値解析モデルの構築は難しい。そこで、実挙動による特性値の変化を考慮できる本試験システムにより、応答

を明確にしようと試みた。プログラムの構築に用いたプログラム言語 (C#) は扱うのがはじめて。基本的な演算方法は他と大差はなかったが、データの受け渡しや読み取りに関して苦労することになった。「実験により取り込んだデータを時刻歴応答解析に反映させるため、実験による誤差を補正する方法がとても重要でした。さまざまな要因を考慮しながらプログラムを構築し、それをまた実験によって確かめる。実験そのものに時間を要するため、とても大変でした。」



卒業論文  
構造系

## 桜建賞

## 誰にも負けない知識を持つ努力をする楽しさ

## 六角形格子により構成されたケーブルネット構造の基本的構造特性に関する研究

松田麻未さん(4年 | 空間構造デザイン研究室)

**主**に大空間建築に用いられてきたケーブルネット構造は、海外ではミュンヘンオリンピック競技場にはじまり、近年も最新事例が報告されているが、国内では1990年代に留まり、普及が進んでいない。そこで、ケーブル材料に対する設計者の理解を深めるため、ケーブルネット構造のシステムの格子形状に着目し、研究を進めることとした。一般的な四角形格子では、鉛直下向きの荷重が加わると、押えケーブルに鉛直上向きの荷重が加わり、吊りケーブルの張力が消失

する。それに対して、本研究で対象とした六角形格子では、曲面全体に応力が均一に生じる。実験では、数値解析的検討により、六角形格子で構成されたケーブルネット構造の力学性状の把握を行い、吊りおよび押えケーブルの両方で荷重に抵抗することを把握した。「自分が掲げたテーマに対する着地点を見失わないように心がけました。発表までモチベーションを切らず研究を進めることが大変でしたが、積み上げていく期間は非常に充実していて、有意義なものでした。」

卒業論文  
計画系

## 桜建賞

## 好きなものを対象にしてつくり上げるものは楽しい

## 茨城県に現存する茅葺き民家の屋根葺き技術に関する考察 - 現地調査と茅葺き職人への聞き取りを中心として -

塚本留加さん(M2 | 重枝研究室)

**最**初は神社建築を研究しようとしたが、うまく進まなかった塚本さんに、先生は民家の調査を進めた。生まれ故郷の茨城には多くの茅葺き民家があり、その修理を見学し、職人さんに話を聞く中で、その面白さに引き込まれていった。茨城県には茅葺き民家が200棟も残っており、その内、重要文化財・県指定有形文化財には20棟が指定されていた。その茅葺き屋根は「筑波流」と呼ばれ、他県とは異なる特徴を持っていた。そのひとつが、新しい茅と古い茅を交互に重ねる「段

葺き」で、今でも多くの民家に残っている。今回は茅葺き屋根を中心に、これまでの研究では触れていない地域や年代との関係性について研究を行った。「茨城だけでなく、京都や長野、福島へも茅葺き屋根の調査へ行きました。長野では、茅狩りと茅葺きの体験が行えるワークショップにも参加しました。人と話すことも、茅葺き屋根も好きなので、調査は楽しく行えたのですが、何よりも調査で実感したことを文章としてロジカルにまとめることが難しかったです。」

卒業論文  
計画系

## 桜建賞

## 疑問と発見が連続していく楽しさ

## ホワイトキューブの登場背景に関する研究

中川紗里奈さん(4年 | 佐藤慎也研究室)

**美**術館の展示室としてホワイトキューブがよく用いられるが、それは80年以上も前に登場したものだと思った中川さんは、芸術は多様に変化しているにも関わらず、それほど長い間支持され続けている空間そのものがすごいと思う一方で、それがどのようにして登場してきたのかについて興味を持ちはじめた。そこで今回の研究では、美術館の展示室として支持されているホワイトキューブが、どのような背景のもとに登場してきたのか、その要因を明らかにしていった。「具体的

に、展示方法と壁面色の関係や、当時好まれた芸術運動、学芸員によるキュレーションなどに着目して研究を進めました。とりかかり方や進め方がわからず悩みました。また、自分の研究に合った内容が載っている資料を探すことが一番大変でした。論文は設計のようにかたちとしては現れませんが、疑問に思ったことや気になったことを調べ、新しい発見をし、最後に調べたことをつなぎ合わせて自分なりの提案ができるところに楽しさがあると思います。」



卒業設計

## 桜建賞

## 設計はあきらめずに根気強く、人を大切にするこ

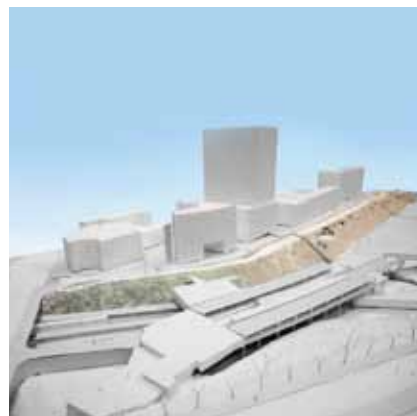
## 身体を通過する建築 - 身体と建築の関係を目指して。建築空間における細部の可能性 -

伊勢萌乃さん (4年 | 田所研究室)

高

校時代からインテリアを学びはじめた伊勢さんは、建築を学ぶ中、身体性について興味を持つようになった。それまで見てきた建築物を振り返ると、ディテールや素材感、装飾などの建築空間の細部にこそ、自分が生きていることや存在を感じることが多かった。そこで、そのような“身体性の力”をもとに設計することに取り組んだ。計画敷地を東京・四谷の外濠に設定し、上智大学に属するグリーフケア研究所を中心としたギャラリーと野外音楽ステージのコンプレック

スを計画した。グリーフとは日常の中で訪れるさまざまな喪失によって生まれた深い悲しみのこと、グリーフケアとはグリーフを抱えた人の心に寄り添いその人が新たな希望を持つことができるように支援することを指す。この施設を訪れた人々が、建築空間の細部に身体を重ね合わせられる空間を提案した。「建築のかたちではない身体性というテーマからのスタートだったので、それを最終的に建築物として答えを出すことが大変でした。」



卒業論文

## 桜建賞

## 他人に理解してもらう難しさが学べた

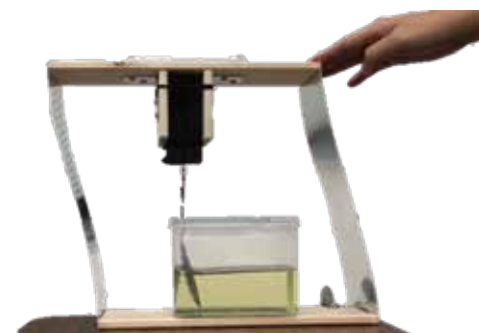
## 身近な粘性体を利用した小規模制震実験

松本夏輝さん (短大2年 | 廣石研究室)

東

京消防庁本所防災館の防災体験に参加し、自然災害の恐ろしさを身をもって知ったことで、地震に興味を持った松本さんは、研究室で制震構造に取り組んだ。制震構造にはオイルダンパーという振動制御装置があるが、どうしてオイルが使われているのかという疑問から、今回のテーマに取り組むこととした。日本は耐震・免震・制震構造が地震対策技術として発展してきたが、これらの構造物は、建築物内部の壁や柱、屋上、基礎部分などに存在しているため、日々の

生活の中では見ることはできない。そこで、簡単な模型を制作し、身近な粘性体（水、油、ヨーグルト、片栗粉水溶液）を使用した実験を行うことで、制震構造のメカニズムを可視化させ、理解度を深めることを目的とした。「実験は失敗をするし、データをまとめるのも大変。しかし、やった分だけ結果がついてくるし、自分で実験の内容や手順、実験装置を考え、調達するのも楽しかった。他人に理解してもらう難しさを学び、プレゼンテーション力も培われました。」



卒業設計

## 桜建賞

## 時間をかければかけるほど良いものになる

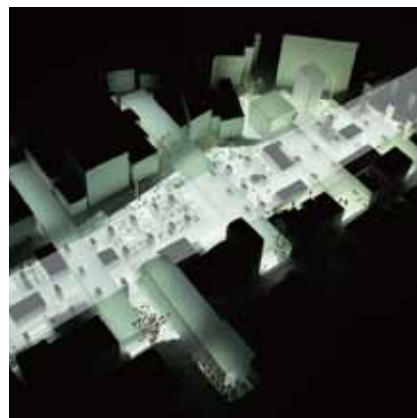
## 阿佐ヶ谷伝士村 - 高架下へ導く辻路コミュニティ -

藤井 英さん (短大2年 | 矢代研究室)

都

市に残された数少ない未利用地として高架下空間が注目を浴びているが、その活用のほとんどは、地域とのつながりが弱く、高架による都市の分断という問題の解決に至っていない。今回は、南北に分断された阿佐ヶ谷のJR中央線高架下に、南北をつなげる5本のパサージュを挿入し、東西に延びる高架下空間にさまざまに行き交う「辻路コミュニティ」を提案した。遮断されていた高架下空間は、「辻路」により、人やもの、記憶や技術などが行き交う、新しいま

ちの中心・出会いの場・人々の拠り所へと生まれ変わる。そこで生まれる一つひとつの交流が、「辻路」でさらに出会いを生み出していくことで、かつて文士が集まり「阿佐ヶ谷文士村」が形成されたように、ここに集う人々が伝士（伝承者）となり、百年の時を経て、文士村から伝士村へと姿を変えて蘇る。「図面を手で描いたものを少しずつ切り貼りして、1枚ずつつくっていくことが大変でした。問題が生じるたびに原点に立ち返り、大切な部分は何かを考えながら繰り返して進めました。」



## オウケンカフェ vol.41 2017年10月25日（水）

ゲスト：阿野太一（建築写真家）

text = 飯嶋貫太（M2 | 古澤・二瓶研）

僕らが建築写真に触れる機会というのは、雑誌か、展覧会か、Twitterか……。考えてみると意外と多い。その割に、建築写真について考える機会は少ないから不思議だ。今回、講演していただいた阿野さんの作品には「見たことがある写真」が多く、僕らが（失礼ながら）無意識に触れている写真を撮った方に話を聞ける、とても貴重な機会だった。

「建築写真には、切り取られた情報がある。」これが阿野さんの話に一貫していたことだと思う。

建築の見方には、いろいろなレイヤーがあって、例えば開口部のディテールに注目したり、間仕切りの配置に注目したり、ひとつの建築を見るにもいろいろな見方があるものだ。建築というものは要素が多い分、さまざまなレイヤーが存在する。鑑賞者がどのレイヤーに焦点を当てるかで見え方が変わる特性があり、建築写真はそもそも多焦点的だと言ってもいいのかもしれない。

話を聞いてわかったことは、建築写真から伝わる空間が、鑑賞者がフォーカスすることができる焦点の集積として伝わってくることだ。阿野さんから「写真とは、どこから撮るかでしかない」という言葉を聞いたときは少し驚いたが、よく考えれば納得できる。写真というフレームに、どのような焦点をどのように配置するか。僕らがiPhoneで写真を撮るときだって、無意識に焦点の選択と配置を行っているのだと気づいて、阿野さんが「写真は誰が撮ったって同じだ」と冗談めかして言っていたことを思い出した。

ところで、レクチャーの後半には、阿野さんの実験的な建築写真をいくつか紹介していただいた。これらはいわゆる阿野さんの作家性が顕著に表れているものだが、僕個人はこれらを、焦点の選択と配置という前提から脱却するためのトライアルとして捉えていた。建築写真は、それ以前に写真なのだから、建築写真にも多様な表現が許されるはずだ。阿野さんのレクチャーから見えてきたものは、建築写真の面白さだけではなく、建築と写真が表現によって互いの面白さを高め合うこと、ひいては建築とメディアと写真の幸福な関係とは一体何なのか、という大きな問いかけでもあったように思う。

暖



## オウケンカフェ vol.42 2017年11月29日（水）

ゲスト：岡安泉（照明デザイナー）

text = 増本慶（4年 | 古澤・二瓶研）

岡安さんのレクチャーでは、照明で空間を演出する際の美的欲求を3つ挙げていた。「均質」「タスク・アンビエント照明」「不可視化」の3つである。「均質」では、光を偏りなく対象へと与える。理路整然としているような空間や企業のファサードで、この欲求に促されたデザインを施している。その中で「ある魅力的なものがあったらそれを均質に照らしたい」とも話していた。それは、

西洋のシンメトリーによる永久を象徴とした美の感覚に基づいているように感じた。ある一点に均質に光を与える行為は、その中を細かく裁断し、対称性を追求する行為である。「タスク・アンビエント照明」では、他者の存在は認知できるが、落ち着きを持ち、光がパーソナルなエリアを視覚化しており、ストレスを緩和するデザインとなっていた。「不可視化」では、ある建築を照らすために隣のビルの屋上を借りて、そこから光を与えるなど、高い位置から光を与える手法や、照明器具が見えないように溝に光を仕込み、反射などで空間を照らす、光の性質を利用したデザインを施していた。

僕らは将来、それぞれひとりずつ強力で手軽な懐中電灯を持つかもしれない、それによって空間を照らして生活する未来が来るかもしれない、とも語っていた。強力で手軽な懐中電灯とはスマホのことであり、強力とは一室を照らすレベルの明るさである。もしもそれが可能になれば、建築のあり方も変化していく。照明が外部化したならば、照明以外のものも外部化、コンパクト化、ワイヤレス化していくのであろう。容易く想像できる変化は、天井高のポテンシャルが僕らに解放されることである。そして、夜間の屋外への進出の手軽さも増すために、屋外空間、半屋外空間も変化していき、より自由な建築へと技術が還元できることが考えられる。

暖



## オウケンカフェ vol.43 2017年12月20日（水）

ゲスト：遠藤克彦（建築家）

text = 青井康治（4年 | 古澤・二瓶研）

2年生の夏、遠藤克彦建築研究所にて、インターンとして大阪新美術館のコンペに参加させていただいた。最初は、敷地見学も兼ねて大阪へ行き、周辺にある同規模の美術館建築を、先生の解説付きで巡った。帰ってきてからは、1日1プラン、模型も提出というノルマのもと、連日、朝から晩まで美術館の設計をする生活が3週間続いた。2年の夏の段階で美術館を設計するのは、それまでの設計とは規模が違い、毎日、先生にダメ出しをされる日々。しかし、慣れてくるとプランがある程度描けるようになり、成長を感じた3週間でもあった。その後、遠藤先生の案が1等になり実際に建つことになった。当時は大変だったが、非常によい体験をさせていただいた。今回は、その後の実施設計に関すること、美術作品と美術館の関わりへの考え方などを聞くことができ、とても勉強になった。2021年の美術館オープンが大変楽しみである。

暖



# NEWS & TOPICS

## 新任紹介

### 石田 優

今年度より助手を務めさせていただくことになりました石田優です。

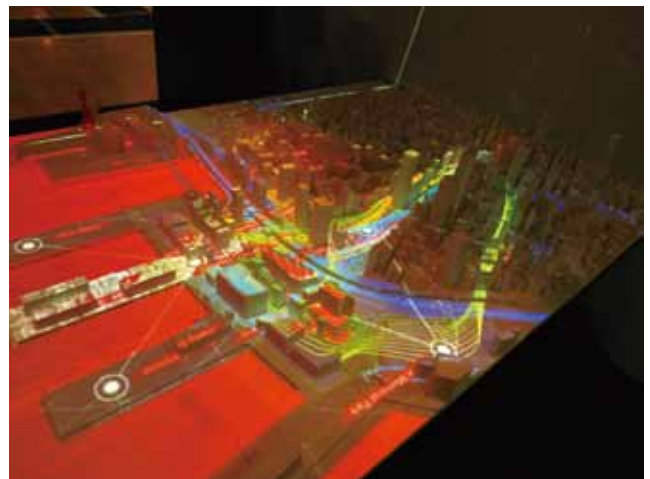
私は、ヴィトゲンシュタインの建築について研究しています。ヴィトゲンシュタインは、哲学者としての著書『論理哲学論考』で有名ですが、生涯に一度だけ建築家として住宅「ストンボロー邸」の設計を行っています。しかし、建築について語ることはなく、未だ多くの謎が残されています。そうした中で私は、この建築の最も特徴的なディテール「二重ドア」について、実際の建築から測定し読み解くことで、ヴィトゲンシュタインの建築理論について考察しています。

特別研究員の活動では、神戸市の3D都市データを作成し、3Dプリンターで出力した模型に共同で未来の都市計画をプロジェクションマッピングするプロジェクトを行いました。

最後に、私自身未熟者ではありますが、学生の皆さまとともに学び、微力ながらサポートしていければと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。



いしだ・ゆう：1988年、熊本県生まれ。2013年、神戸芸術工科大学大学院芸術工学研究科修士課程修了。2016年、同博士後期課程修了（博士（芸術工学））。2016～18年、神戸芸術工科大学特別研究員、建築設計事務所勤務を経て現職。



左上：ストンボロー邸外観。

右上：ストンボロー邸ホール。

下：Curating the city : kobe、シーグラフィアジア2015 出展（共同）。

## 人事

### ○人事(建築学科)

・4月1日付の人事で、富田隆太准教授が教授に昇格した。

・建築学科の非常勤講師の新旧交代は以下の通り（敬称略）。

〈新任〉：大石雅之（デザイン基礎、建築設計Ⅰ）、大平貴臣（デザイン基礎、建築設計Ⅰ）、大貫浩嗣（建築施工法）、富永大毅（デザイン基礎、建築設計Ⅰ）、中村航（デザイン基礎、建築設計Ⅰ）、野島秀仁（建築設計Ⅳ、Ⅴ）、矢田麻衣（環境システム解析）、与那嶺仁志（特別講義）  
 〈退任〉：浅子佳英（建築設計Ⅰ、Ⅱ）、伊藤博之（建築設計Ⅵ、Ⅴ）、金島正治（環境システム解析）、鹿内健（建築設計Ⅲ、Ⅳ）、塚田修大（建築設計Ⅵ、Ⅴ）、三橋博巳（建築マネジメント）、三戸景資（建築施工法）、宮坂知明（建築設計Ⅲ、Ⅳ）

・建築学専攻の非常勤講師の新旧交代は以下の通り（敬称略）。

〈新任〉：小泉雅生（サステナブルデザイン特論）、小堀徹（建築構

造特論Ⅱ）

〈退任〉：池田耕一（建築環境工学特論Ⅱ）、早川眞（サステナブルデザイン特論）

### ○人事(短期大学部建築・生活デザイン学科)

・短大の専任講師の人事に関する情報は以下の通り。

〈新任〉：石田優 助手

〈退任〉：吉野泰子 教授、高田康史 助手

・短大の非常勤講師の人事に関する情報は以下の通り（敬称略）。

〈新任〉：大塚茂仁（建築生活デザインの基礎、建築デザインスタジオⅠ）、吉野泰子（建築気候、福祉住環境計画）

〈退任〉：小石川正男（建築デザインスタジオⅡ、Ⅲ）、高安重一（建築生活デザインの基礎、建築デザインスタジオⅠ）

# NEWS & TOPICS

## 吉野泰子短大教授が中国天津市から「感謝状」を授与された

吉野泰子短大教授（当時）が日中共同研究の成果により、中国天津市から「感謝状」を授与された。この研究は天津城建大学教授の王岩先生（吉野研究室修了生）とともに「介護福祉施設の温熱環境実態調査」として実施されたもので、その成果をふまえた施策が立案された。

## 未来のとびらコンテスト2017〈大学生版〉第3回学生デザインコンペにおいて建築学専攻1年の増田俊君、村岡祐美さん、平間裕大君と建築学専攻2年の太田みづきさんが優秀賞などを受賞

「未来のとびらコンテスト2017〈大学生版〉第3回学生デザインコンペ」（主催：三協立山 三協アルミ社）において、建築学専攻1年（当時）の増田俊君、村岡祐美さん、平間裕大君（すべて今村研）の作品「まちを巡る学び舎」が「優秀賞」、建築学専攻2年（当時）の太田みづきさん（今村研）の作品「地形に寄り添う門前町 1300年の時をつなぐ、にぎわいのスロープ参道」が「優秀賞」および「三協アルミ賞」を受賞した。テーマは「ずっといたくなるまち」で、応募総数66点から、1次審査会により8点を選ばれ、プレゼンテーションを経て最優秀賞1点に次ぐ優秀賞3点に選ばれた。



「地形に寄り添う門前町 1300年の時をつなぐ、にぎわいのスロープ参道」

## 全国合同卒業設計展「卒、18」において建築学科4年の本田偉大君が中川エリカ賞を受賞

「全国合同卒業設計展『卒、18』」（主催：「卒、18」実行委員会）において、建築学科4年（当時）の本田偉大君（今村研）の作品「アジアータウン構想 移民1000人の営みでできた建築」が「中川エリカ賞」を受賞した。講評会が2日間行われ、それぞれの日において、一次審査（ポスターセッション）により10作品が選ばれ、二次審査（公開プレゼンテーション）により最優秀賞1点（のべ2点）、それぞれの日の審査員による審査員賞4点（のべ8点）が選ばれた。本田君は両日とも二次審査に進み、審査員賞のひとつに選ばれた。

## 千代田区を舞台にした学生設計展2017において建築学科4年の本田偉大君、田村隼人君、長谷川謙人君が学生優秀作品賞を受賞

「千代田区を舞台にした学生設計展2017」（主催：公益社団法人日本建築家協会千代田地域会）において、建築学科4年の本田偉大君（今村研）の作品「神田カルチャータン」、田村隼人君（今村研）の作品「排からの脱却」、長谷川謙人君（佐藤光彦研）の作品「Takebashi REVIEW」がそれぞれ「学生優秀作品賞」を受賞した。これは、都心の都市環境にふさわしい建築の未来像を探索することを目的に毎年開催されている。

## 2017年度日本建築学会大会（中国）学術講演会において建築学専攻1年の山崎由美子さんと2年の永峰 馨君、坪井新拓君が若手優秀発表賞を受賞

2017年度日本建築学会大会（中国）学術講演会シェル・空間構造部門（主催：一般社団法人日本建築学会シェル・空間構造運営委員会）において、建築学専攻1年（当時）の山崎由美子さん（鋼構造・対雪設計研）の論文「構造用ケーブルの応力-ひずみ関係に関する実験的研究」と、建築学専攻2年（当時）の永峰 馨君（空間構造デザイン研）の論文「四辺単純支持された建築用板ガラスの耐風圧強度に関する基礎的研究 その4 板厚が破壊荷重と許容耐力に及ぼす影響について」が「若手優秀発表賞」を受賞した。本賞は30歳未満の学生・社会人・研究者を対象としてシェル・空間構造に関するセッションで優れた発表を行った学生などに授与される。対象者120名のうち受賞者14名に選ばれた。また、2017年度日本建築学会大会（中国）学術講演会環境心理生理部門（主催：一般社団法人日本建築学会環境工学委員会）において、建築学専攻2年（当時）の坪井新拓君（建築音響研）の論文「建物用途別の利用者からみた要求性能の調査 床材の総合性能評価方法に関する研究：その1」が「若手優秀発表賞」を受賞した。

# MESSAGE FROM OB/OG

卒業から〇年、OB/OGから現役学生の皆さんへのメッセージ vol.3

## 入社して10年、つくり手と使い手 両方に愛される建築物を目指して

**私**は「建築設計」の仕事をしています。設計者はプロジェクトを主導する立場で、企画から建築物の竣工まで関わります。設計段階では、建築主の要望を聞き、スケッチや模型を用いて建築のデザインを決め、図面を描いています。また施工段階では、施工図といわれる現場の職人が施工をするために必要な図面を用いてディテールデザインを決めたり、監理者として図面通り施工されているかの確認を行っています。そのように日々、建築主の想いをかたちにすることを仕事にしています。

### 社会に近い立ち位置の研究室に所属して

小学生の頃から図工や美術が好きで、モノをつくる職業に就きたいと思っていました。高校生のときに、あるテレビ番組で地元の名古屋市の美術館を設計した建築家・黒川紀章さんの特集を観た際に、建築のデザインの仕事が、人・街・歴史にまで影響を与えるようなスケールが大きい仕事だと感じ、建築設計の仕事を目指すようになりました。



駅前のロータリーに面する銀行が入るオフィスビル。企画から竣工まで携わった最初の作品。

所属した今村研究室では、国内外の実施コンペや実施設計プロジェクトに携わってプレゼンテーションの場に出席したり、既に社会に出られた研究室の諸先輩方とそれらを通して多くのコミュニケーションができていたため、他の学生よりも社会に近い立ち位置で、実践的な教育を受けていたように思います。仕事を始めた頃は、その経験が自信となって、業務に取り組むことができました。

学生の頃の設計課題では、新しさや格好良さなどを追及し、自分がやりたいことをかたちにしていましたが、仕事を始めてからは、建築主が求める機能・条件、施工コストや施工のしやすさなど、設計者が考えなくてはいけないことが多く、図面の線を引き重みが変わりました。一方で、多くの人たちと関わりながら建築をつくると、自分には気付けなかった発見があったり、学ぶこ



松波圭亮（まつなみ・けいすけ）

-所属：竹中工務店東京本店 設計部

-資格：一級建築士

-所属研究室：今村雅樹研究室

-修士設計テーマ：地域文化を核とした社会教育拠点となる都市型地域施設の計画

とがとて多く、今ではそのようなコミュニケーションが良い建築をつくる上で大切なことだと考えています。

### 社会に出てわかった日大理工の良さ

日大理工建築を卒業して良かったと思うことが大きく3つあります。1つ目は「卒業生」が多いこと。私は卒業してから大阪と福岡を転々としたますが、どこでも卒業生と出会うことができます。年代を超えたつながりが生まれます。2つ目は「同級生」が多いこと。いろんな考えを持った人と交流ができるため、刺激を多く受けることができます。また卒業後も多くの友人たちと情報交換ができるのも魅力です。3つ目は「先生」が多いこと。常勤・非常勤ともに先生が多いため、社会とつながる多くのチャンスが広がっていることになります。自分のやりたいことを見つけるにはとても贅沢なことではないでしょうか。

### つくり手、使い手から愛される建築物をつくりたい

これからの目標は、自分で「作品」と言えるような建築をつくることです。入社して10年目。成功も失敗も含めて、建築設計という仕事をようやく一通り経験できたように感じています。当たり前かもしれませんが、つくり手と使い手の両方に愛される建築物をつくりたいと思っています。それは両者が想いや時間を共有し、議論を重ねなければ生まれないということを学びました。その中で、設計者として時代の感性を持ちながら、新しい価値を提供し、そこから生まれた「作品」が社会や人にインパクトを与えることができれば最高です。

吸



福岡の寺院の庫裡の設計で、宮大工とともに、屋根をかたちづくる破風のラインやバランスを原寸で確認しているときの写真。設計者、施工者、建築主が一同に介している現場。

# ARCHITECTURE & ME

[ 連載 ] 私と建築 vol.91

## 建築環境工学の専門家として

text= 金島正治 元特任教授

**私**と環境工学との出会いは、大学4年の研究室選択時でした。時は公害問題真っ盛りで、都市環境保全に対する社会的要請も大きく、研究する分野として建築設備講座で研究をはじめました。学位取得後は研究生活で大学に残ることなく、直接社会と関わり、都市環境に関連する施設づくりもできるゼネコンで、環境関連のエンジニアリング技術開発担当を条件に勤めることになりました。そこで最初に任されたのが、太陽エネルギー利用関連の開発でした。

仕事の中で記憶に残るものとして、イラク太陽エネルギー研究所があります。国際設計コンペで採択され、イラン・イラク戦争の最中にバクダッド大学の隣接地に建設したものです。本研究所は、太陽熱エネルギー利用を前面に押し出して企画設計したもので、イラクの研究者とともに工夫しながら建設しました。国の威信をかけた技術アピール物件で、完成後には国連の後援で湾岸アラブ諸国の関連技術者トップがバクダッドに集まり国際会議が開催され、研究所外観は郵便切手の図柄にも採用されました。現在はどうなっているかわかりませんが、グーグルマップの写真では確認できます。

もうひとつは、大分県上浦町の沖合に設置した洋上太陽光発電シ

かねしま・まさじ：1947年、東京都世田谷区生まれ。東京都立新宿高等学校卒業。1971年、東京工業大学建築学科卒業。1973年、同大学院修士課程修了。1976年、同 博士課程修了（工学博士）。1976年、清水建設入社。2009年、日本大学総合科学研究研究所教授。2012年、日本大学理工学部特任教授。

ステムです。コンクリート製バージを浮かべた独立発電システムです。建設にあたり準拠する法的基準がない中、北海に設置してある石油掘削バージの技術を活用して設計・施工しました。設置にあたっては、第7管区海上保安本部に出向き、海図に記載してもらったことも思い出です。本システムは、小学校3年生の理科教材に掲載されたり、町を紹介する歌の題材になったり、汚水マンホールの蓋に図案化されて設置されるなど、教育・啓発活動に利用された思い出に残る仕事です。現在は、初期の開発目標を無事に終えて、記念公園のモニュメントとして、陸上に引き上げられて設置されています。

建築環境工学という何か見えない仕事のように思われがちですが、実は太陽電池が建築物の外壁を飾るなど、目に見えるところで社会的な啓発に幅広く活用されている技術分野です。現在、私は地域コミュニティでのエネルギー活用技術を通して、地域興しの手伝いをはじめました。培った技術でどのような貢献ができるかを模索中です。きっと皆さまの力をお借りするときがあると思います。その折には、さまざまな知恵をお貸しください。

■



左：洋上太陽光発電システム  
右：遠景に記念公園と汚水マンホール蓋

# Contents

## 02 [SPECIAL FEATURE]

### 船橋キャンパスヒミツ巡り。

- COLUMN 1 | 船橋キャンパスから世界へ - 空間と構造の交差点 text=斎藤公男 名誉教授  
 COLUMN 2 | 発生期-形成期-発展期 船橋キャンパスの変遷と建築 text=伊澤岬 名誉教授  
 COLUMN 3 | 船橋キャンパスで私が関わった3つのプロジェクト text=渡辺富雄 特任教授  
 COLUMN 4 | 14号館 - サステナブル建築 - text=早川真 元教授  
 COLUMN 5 | サークル活動のための居場所を実態調査から考える text=山中新太郎 准教授  
 COLUMN 6 | 船橋キャンパスの実験施設 text=宮里直也 教授  
 COLUMN 7 | 船橋キャンパスをエンjoyする7つのコツ text=山崎誠子 短大准教授  
 COLUMN 8 | 空き時間の過ごし方どうしてる? text=古澤大輔 助教

## 14 速報! 2017年度に受賞した 修士論文・設計&卒業研究・設計12

## 18 [REPORT]

オウケンカフェ

## 19 [NEWS & TOPICS]

- ・新任紹介/人事
  - ・吉野泰子短大教授が中国天津市から「感謝状」を授与された
  - ・未来のとびらコンテスト2017〈大学生版〉第3回学生デザインコンペにおいて建築学専攻1年の増田俊君、村岡祐美さん、平間裕大君と建築学専攻2年の太田みづきさんが優秀賞などを受賞
  - ・全国合同卒業設計展「卒、18」において建築学科4年の本田偉大君が中川エリカ賞を受賞
- ほか

## 21 [Message from OB/OG]

- vol.03 入社して10年、使い手とつくり手、両方に愛される建築物を目指して  
 松波圭亮（竹中工務店/2008年修了）

## 22 [Architecture & Me]

- vol.91 建築環境工学の専門家として text=金島正治 元特任教授

## 24 [Visit & Criticism]

- 学生建築探訪 vol.5 旅行へ行こう! text = 飯嶋貴太（M2 | 古澤・二瓶研）

## SHUNKEN 2018 Apr. Vol.46 No.1

「駿建」

発行日：2018年4月1日

発行人：重枝豊

編集委員：佐藤慎也・宇於崎勝也・宮里直也・山中新太郎・井口雅登・

古澤大輔・堀切梨奈子・宮田敦典・廣石秀造

編集・アートディレクション：大西正紀+田中元子/mosaki

発行：東京都千代田区神田駿河台1-8-14 日本大学理工学部建築学科教室

TEL：03(3259)0724

URL：http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp

※ご意見、ご感想は右記メールアドレスまで<shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp>

## Visit &amp; Criticism

学生建築探訪 vol.5

## 旅行へ行こう！

text = 飯嶋貴太（M2 | 古澤・二瓶研）

新1年生の皆さん、はじめまして！今年度も駿建の裏表紙は、「学生建築探訪」を連載します。この連載は、「学生が建築を見て、語る」というシンプルなもの。昨年度からはじまり、美術館や商業建築など、そのとき話題のさまざまな建築を見て周りましたが、今回は少し趣向を変えてみようと思います。

ところで皆さんは、この春休み、どこか旅行に行きましたか？旅行ってめちゃくちゃ楽しいですね。ちなみに僕は、今書いているこの原稿などのため、忙しくて行けていません。僕の中にある「旅行に行きたい」という欲を満たすために、今回は建築探訪の啓発活動という名目で、楽しかった旅行の思い出に浸ってみたいと思います。

長期休暇の時期は「青春18きっぷ」が発売されます。これは、JRの普通・快速列車が乗り放題になる切符で、賛沢ができない学生にとっては大変ありがたいものです。僕はこの切符を使って、まる一日かけて広島県まで行ったことがあります。朝5時の電車に乗って、広島に着いたのは夜の22時、その間は普通列車に乗りっぱな

しです。

車中の過ごし方は、やはり読書。これから旅行に行く後輩諸君に一冊すすめるとするなら、レム・コールハースの『錯乱のニューヨーク』はどうでしょう。現代建築を語るときによく引き合いに出される名著で、エッセイ風だし、文庫化もしていて、何より長くて難しくて眠くなります。いやいや、内容はとても面白いのですが、難解な部分もあるし、読むのに時間がかかるので、車内で読んで眠くなったならそのまま微睡むのがおすすめです。

さて、この広島旅行は学部2年生の終わりに友人と2人で行ったのですが、僕はここで訪れた村野藤吾の「世界平和記念聖堂（写真1）」にいたく感動しました。この建築は、戦後になって平和を祈るために建てられた聖堂ですが、ここへ入った途端に友達と「ウッ」とかよくわからない声を出しました。そのときの感情と理由をうまく説明できないのですが、直前に訪れた、戦争の記憶を後世に残すための記念碑でもある丹下健三の「広島平和記念公園（写真2）」とあ



わせて、戦争というどうしてもなく大きな背景を肌で感じたことは確かです。

日本近代建築史において、村野と丹下はよく比べて語られます。国家的なプロジェクトで力強い表現を行った丹下に対し、村野は商業プロジェクトをはじめとした人間的な表現を行いました。詳しいことは、ぜひ自分で調べてみてください。ともかく、対立項として語られることが多い2人の建築家が、戦争という共通のテーマのもと設計した作品を見るというのは面白いものでした。そこに現れる対立は、どちらにも用いられたコンクリートの違い。あるいは、建築の目的から現れる記念／祈念という空間の違い。そういったものを頭で考えながら、頭では理解できない感情を抱えて、聖堂近くのドーナツ屋で友達とぼーっとした記憶があります。

僕は広島県のあと、1週間くらいかけて福岡県まで南下したのですが、もうその頃にはぐったりしていました。連日マンガ喫茶に宿泊し、宿代を浮かせた分は地酒を飲みまくっていたのですから、そりゃあもうくたくたです。そんな状態で、最終的には伊東豊雄の「ぐりんぐりん（写真3）」を見に行った際に近くの遊具ではしゃいで腰を負傷するのですが、その話はまた別の機会に。

博多から帰ってきて、家に戻るまでの道中の感覚はとても面白いものでした。いや、これに限らず、旅行から帰ってくると毎回そうなのですが、見慣れた風景に少しだけ違和感を持つのです。それは旅行に出て、大小さまざまな経験をして、日常では得られない何かを得たからなのでしょう。旅情を味わうとはそういうことでしょうか。旅情を味わうとはそういうものだと思います。皆さんもぜひ、旅行に出て、できれば建築を見て、何かを得てきてください。



「駿建」では、在学生、教員、非常勤講師の皆さまからの、コンペやコンクール、学会、スポーツ大会、その他の受賞・表彰に関する情報提供を下記メールアドレスにて受け付けています。＜shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp＞